自像葬

漆々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自像葬

【Ｎコード】
Ｎ２９３９Ｊ

【作者名】
漆々

【あらすじ】
「ドッペルゲンガーを見た者はドッペルゲンガーに殺される」
そんなの昔の人が考えたオカルトの類だと思ってた。
当たり前の日常を過ごしていたはずの
「私」がもう一人の「私」に出会う　微ホラー小説

第一小節：ドッペルゲンガー

そこは昔よく遊んでいた
だだっ広い空き地だった

現在は、以前行われた工事の為
そこらに鉄パイプが散乱している

数年前　町はずれに唯一あった小さな図書館の代わりが
この空き地に建設される話だったらしいけど、
ここ何年もこの状態で一向に工事が進んでいるとは思えない。
というか工事してる姿を見たことがない

最近は気がつくとここへ来ている

工事現場の奥はまだ工事も及ばず
鉄パイプで空が覆われていない。
この小さなスペースが私のお気に入りだった

適当な岩に腰を掛けて
ここからぼーっと空を眺めるのが
小さい頃からの贅沢。

「本日は生憎の曇りですが…」

晴れの日に雲の流れを見るのは好きだけど
ぎゅうぎゅうに敷き詰められた雲を見つめる趣味はない。

「…雨降りそうだし帰るかな。濡れたくないし。」

そう呟いて立ち上がったときだった

カタン…ッ

「？」

物音に気付いて　振り返ると

人……？

コートに身を包み、頭からフードをかぶった小柄な人が立っていた

小柄と言っても私と同じくらいの身の丈で
フードから髪が垂れている…女の子かな。
まだ雨も降っていないのに頭からフードを深々とかぶっているのは

さすがに不気味に感じたが
それ以前に　自分以外の人間がこんな所にいることだけで十分不気味だった

私に気付いているのか、いないのか。
こっちへ向かって歩いて来る
そしてその女の子を見つめる中、ふと感じた違和感

見覚えのあるコート……靴も

そしてその違和感は
じりじりと近付いてくるそれに同調するように
徐々に確かな恐怖へとすり替わっていった

（どうしよう…
　逃げた方がいいのかも知れないけど）

外へ逃げるにはあの女の子を横切らなければいけない
ジリジリと近づいてくる女の子の
右手は何かを隠し持っているようだった

そして頭が直感的に危険だと判断したときには
もうあれこれ考える余裕もなくなるほど近くにきていた

そして、あと一歩で私に飛びかかれるだろうという距離まで相手が

詰め寄った
まさにそのとき

「……！？」

一瞬何が起こったのか分からなかった

雷が大きな音と共に光り
辺りが一瞬　真っ白になった

と同時に

私は女の子を横切り
全力で出口に向かって走っていた

感じたことのない恐怖に追われながら
角を曲がる瞬間　後ろを振り返ったが

女の子は追いかけて来るわけでもなく
ただその場に立ち止まって　こっちを見ていた

第二小節：雨と出逢い

小雨が降りだしていた

すでに息は切れ切れで
もう大丈夫だと思っていても足が止まらなかった。
わけのわからない恐怖が体を動かした。
女の子を横切るとき見てしまった

あれは

私だった

わけがわからない。
どうして…
―同じ自問を繰り返しながら走り続けた。

＊＊＊＊＊

どれくらい走ったか

どの道を選んできたかも覚えていない。
気付けばそこは人気のない路地だった。

「もう…走れない」

こんなに走ったの初めてだ。
一度その場にうずくまると体が言うことを聞かなくなったように動けなくなった。
仕方なく　しばらくそこで休むことにした。

秋も中頃で　もう日が落ちるのが早い。
ただでさえ曇りで薄暗かったのに
心音がおさまるころには辺りは真っ暗になっていた。

冷たい風が止んだのをきっかけに立ち上がり
意味もなく辺りを見回した

「…！」

…誰かがこっちを見ている。
治まったばっかりの心臓がまた張り裂けそうになった。

心を落ち着ける間もないまま
もう一度ゆっくりと振り返ると

……大人？

そこには男性が立っていた

４０歳くらいのおじさん
細身で長身
髪はぼさぼさで無精髭を生やしている

見るからに怪しい。
けど　さっきの今だったから
どちらかと言うと人に会えたことに安心した。

男性は不審がる様子でこちらを見ている。
こんな人気のない場所でうずくまっていたのだから当然と言えば当然だ。

「あ、大丈夫です」

私が先に声をかけようとすると
男性はびっくりしたような表情を浮かべ

「……！
君は……そうか」

「…？？」

何が何だか分からなかった

頭の上に「？」を浮かべまくっている私を見て
おじさんは続けた

「…そうだな。
突然のことでびっくりしただろう
ついて来るといい、何があったか教えてあげよう」

「え……？…ええ？」

まるで事を知ったような口調で
それだけを言い残しておじさんはその場を離れていく。

普段ならついて行くはずもないんだけど
私はおじさんの言葉が気になってついて行くことにした。

何より今は　1人になることの方が怖かった。

第三小節：雨宿り

舗装されていない道路を歩く
周囲の木は枝が伸びたい放題で
車など到底通れそうにない

「この先は…確か」

そこは廃館になった町はずれの図書館だった。
迷うことなくおじさんは館内へ進み
入口から一番近い部屋に入っていった。

遅れないように少し小走りになると
床に落ちたガラスの破片がジャリジャリ音を立てた。

部屋の中は全く使われている感じはせず
部屋中にある本棚には何冊か
本がまばらに並べられているだけだった。
おじさんは着くなり部屋を物色しはじめた。

しばらく無言が続いたせいか
少し和らいでいた不安が徐々に甦ってきた

（私、考えたら全然知らない人について来てるんだ…）

そのとき

「君の見たものは…
ドッペルゲンガーだろう。」

「…！」

部屋の奥にある小さな机に腰をかけたおじさんが切り出した。
おじさんは　いつの間にどこから持ってきたのか
手に持っていた蝋燭(ろうそく)に火をつけて机に置いた

「ドッペルゲンガー？…ってあの…」

「…まぁ大方君の思っているものと大した違いはないだろう。
自分とは違う、もうひとりの自分を目撃する現象のことだ。」

信じがたいことを口にするこの大人に少し驚いたが
実際、事が起こったあとでは疑う理由もなかった

「そのドッペルゲンガーがなんで…」

「ふむ…一般的には死期が近いだとか、
死の予兆と言われてるが…」

「そんな…！私もうすぐ死ぬってことですか！？」

「俗説的にはそうだろう。
ドッペルゲンガーを目撃すれば
そのドッペルゲンガーに殺されると聞く。」

それを聞いた瞬間　全身に鳥肌が立った
「そんな…」
あの時の私は、私を殺そうとしてたんだ

おじさんはショックを受けている私を無視するように　また部屋を物色しはじめた

「しかし勝手な話だと思わないか？
突然理由もなく自分に殺されるなんて。」

おじさんは少し困ったような笑いを浮かべ
その後で私の不安を煽るかのように

「しかも一度現れたドッペルゲンガーが
放っておいて消えたと言う例は聞いたことがない。」

「…それじゃあ―！私はどうしたらいいんですか！
このまま怯えて過ごせって言うんですか」

悲観的な事ばかり言うおじさんに少し苛立って
私は追い詰めるように聞いた

「…おそらく方法がないわけじゃあない。」

「…方法って！？」

「……」

もう一度問いただそうかと凄む私を見て
おじさんがゆっくり口を開いた

「君が殺せばいい。」

おじさんはあからさまに舌足らずな答え方をした。

「…！」

「簡単な事だ。
２人いるのなら不要な方を始末すればいい。」

「殺すって言ったって…
いっつも包丁か何か持ち歩かないといけないんですか」

「ふむ。物騒な話だな。
逆に殺されなければいいが。」

洒落にならない

「おじさんは…なんでそんなに詳しいんですか」
「…見たからだ。」
「おじさんも…？」
おじさんは難しそうな顔をしながら目を通していた本を棚に戻し
今度は少し薄めの本を手に取った
「見たからというのは理由としておかしいな。
確証があるわけじゃない。」
「でもおじさんが今はこうして無事ってことは…」
「いや…見つかっていないだけの話だよ。
あの時は逃げ出したからね。
ふむ…何の事だかさっぱりだ。」
読んでいた本を諦めてまた机の上に腰をかけた
「じゃあ殺せばいいっていうのも
確証があるわけじゃないんだ。」
「そもそもドッペルゲンガーは
霊的な思念という説がある。
刃物で刺して殺せるかどうかさえ分らないよ。」

おじさんの予測や一般的な見解というものに
これ以上言い返す気にはなれなかった

「…おじさんはずっとここに隠れてるんですか？」

「いや、だがいつも不思議とここへは来てしまう…。
もしかしたらドッペルゲンガーの原因がここにあるかも知れないな。」

それから少し間を開けて
「…まったく、思念かなんだか知らないが迷惑な話だ。」

また困った顔をしたおじさんだが今度は笑わなかった
まるでドッペルゲンガーの気持ちを汲んでいるかのようだった

その後は特に大した話はしなかった。
おじさんは同じ境遇にいる自分を
私に知らせたかっただけなのか
決定的なことは何も分からないまま

「じゃあドッペルゲンガーの倒し方
分かったら教えてくださいね、絶対ですよ！」

そう約束をしてその日は別れた

最初は不安でいっぱいだったが
同じ状況の人がいるだけで私は少し心強かった

第四小節：夕立と変わりゆく

次の日、同じ時間に同じ場所を訪ねてみたがおじさんはいなかった。
おじさんのいない部屋はひどく殺風景に見えた。
もともと殺風景ではあっただろうけど
そこには確かにそう感じる理由があった

「本が…ない。」

本棚にあった本は一つ残らずなくなっていた。
全部をおじさん1人で運び出すのは少し難しい量のはずだったけど…
不思議に思ったが　おじさんも帰ってくる気がしなかったので
その日はすぐにその場を去った。

そしてさらに何日か後の夕方。
部屋の中を覗いてみたけどやっぱりおじさんはいなかった

「もしかして、ドッペルゲンガーに見つかっちゃったのかな…」
少し心細くなったけど確証はないのでそれ以上は考えないことにした
起こってもいないことに不安になるのはよそう

しかし

次の瞬間に
それ以上考える必要はなくなってしまった

今日はもう帰ろうと後ろを振り返ったその時だった

一瞬で、両目が記憶した光景は
頭が理解するよりも早く　私の体を凍りつかせた

見てしまった

部屋の奥

夕日で真っ赤に染まる壁にもたれる人陰

顔は影になっていて見えなかった

誰だろう

分かりきったをことをあえて避けるように
自問自答を繰り返し

少しずつ　少しずつ　顔を覗き込んだ

「……っ」

おじさんは

首から血を流して倒れていた

「……っん」

私は泣きそうになるのを必死でこらえた

ここで涙が零れたら
しばらく立ち直れない気がした

自分と同じ境遇の人間が殺されたことや
ドッペルゲンガーを見たものが殺されるという事実。
自分ももうすぐ殺されるんじゃないかという絶望感で
頭の中がぐちゃぐちゃになりそうだったから

それに　いつまでもこんな場所にいるわけにはいかない。
こんなとこ　もし人に見つかったら言い訳のしようがない。

「…とにかく、離れなきゃ」

冷静にと、必死に自分を偽って
逃げるように　その場を去った

いつの間にか夕日は堕ちていて
雨が、降りはじめていた

第五小節：自像葬

走りながら考えた

逆におじさんがあそこでドッペルゲンガーを殺したとは考えられないだろうか

でも相手がおじさんの言うとおりの霊的な思念ならドッペルゲンガーが殺されて死体が残るだろうか

ひとつひとつ順を追う様に考えを巡らすうち
浮かんできた情景

あの死体を見たときに感じた違和感

あれは…おじさんだった…よね

顔ははっきり見た

なのに、その死体は
おじさんと同じ顔をつけているのに
話したこともない、なぜか知らない人だと
そう思えて仕方がなかった。

人間を殺したドッペルゲンガーは
その後どうなるのだろう

ドッペルゲンガーに同情するような
おじさんの顔が忘れられなかった

（思念かなんだか知らないが…迷惑な話だ）

（いつも不思議とここへは来てしまう…）

他愛もない小さな違和感は

考えれば考えるほど
答えをある事実へ向けていった

「もしかしておじさんは…」

ふと気がつくとあの空き地の前に立っていた。
ドッペルゲンガーに襲われた場所。

私の体はあの日の恐怖を無視して何かに誘われるように足を進めた。

私もおじさんと同じように　ここに思い入れがある。
だからあのときドッペルゲンガーも…

今ここにいるという確信はなかった
ただ、そんな気がしたから

進むにつれて徐々に歩幅は小さくなり
角へと差し掛かった

そして

まるで分かっていたかのように両目が捉えた人陰
あそこにいるのは間違いなく…私だ

入り組んだパイプの隙間から見える
こちらに背中を向けて一点を見つめている

落ちていたパイプを手に取り
少しずつ　なるべく音を立てないように近づいた

幸い雨音で少しくらい音を立てても気付かれなさそうだった

ただでさえ重いパイプを持った手が震える

「あれは生きものじゃない…生きものじゃないんだ」
分かっていても自分にそう言い聞かせるしかなかった

さらに雨は強くなり　空が唸りだした

もうその気になれば飛びかかれる
手に持ったパイプが熔けるほど握りしめた

（殺さなきゃ　殺されるんだ　今しかない）

そして、ついに一歩を踏み出した。
心臓の音がどんどん大きくなるのが分かった。
この音が雨音の隙間を縫って
向こうに伝わってしまうんじゃないかと心配になる。

しかし雨音の隙間から聞こえたのは別の
聞こえるはずのない誰かの声だった。

―勝手な話だと思わないか？
突然理由もなく自分に殺されるなんて―

「えっ？」

思わず声が漏れた。
同時に落ちていた何かに躓き
その衝撃でパイプが手からすり抜けた。

―カララン……ッ―

「！」

まずい

気付かれた　と感じたその瞬間

曇り空を引き裂くような雷鳴とともに
背後で空が光り　辺りが一瞬にして明るくなった

予想外の大きな音に驚いた体は

何も考えなくても
反射的に　次にするべきことを理解していた

＊＊＊＊＊

雨音が響く―
雨は嫌い。濡れるから。

”音”は聞こえていない　感触だけ

私の両手は　近くに落ちていた

コンクリートの破片を何度も
目の前のそれに叩きつけていた

無心で、何度も

途中聞こえた声の意味は考えず
何度も、何度も　何度も、何度も—

そうしているうちに

雨音は遠く　霞んでいく視界の中で

私は　私の死体を見つめながら

自分だけが濡れていないことに気がついた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2939j/

自像葬

2011年10月6日14時34分発行